
隙間の文明

土方一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隙間の文明

【Zコード】

Z8748Z

【作者名】

土方一

【あらすじ】

かんがえちゅうん——

1日目 選定

「間もなく選定が開始されます」

ああ…今日も始まった

「…『スギュウヤ…東京都千代田区…』」

テレビから聞こえて来る無機質な人の名前を読み上げる声、この中に自分の名が無いことを確認するのが俺の…いや、この国の国民の日課だ

とは言つても1日5人から10人しか呼ばれない、皆自分は呼ばれるることは無いと当然の様に思つてる

半年ほど前から始まつたこの放送、名前を呼ばれるとどうなるかは誰も知らない

始めは名前を呼ばれるとどうなるのか皆気にしていたが徐々に話題に登らなくなつた

まあ知り合いが呼ばれたと言つた話は誰からも聞いたことないし自分が関わることもないだろう…

そういうえば近所の住所が呼ばれた時はちょっとびびったな…

うちは近所付き合いが盛んな割には全然知らない名前だつたけど

「…イケダ マモル…」

……俺の名前！？

「冗談だろ… 同姓同名なだけのことを祈りつつ住所を確認したがどうやら俺のことの様だ…

これから何が起るのか不安だかとりあえず会社に向かおう

「今日の放送で俺呼ばれちゃったんすよー」

出社して一番廊下にいた先輩に相談してみた

が、先輩は気づかなかつたのかスッと自分の部署へ行つてしまつた

名前を呼ばれてしまつた意味はすぐに理解した

誰も俺の話を聞いてくれない… と嘆つより話しかけてる」と云つて
いてくれない

俺を認識していないので

事態に戸惑いつつも俺は自分のデスクへと向かつがあるべき場所に
俺のデスクが存在していなかつた

よくよく見渡してみるとこの慣れ親しんだ部屋に俺に関わりのある
ものは存在しなくなつていた

気が狂いそうだ…

とつあえず誰も気にする」ともないだろうか一田家で落ち着いつ

自分の部屋が見えて来たとき俺は愕然とした…

俺が住んでいた部屋は空き部屋となっていた

それもさも今まで何年も誰も住んでいない様子のようだ

半狂乱になつた俺は必死に自分の痕跡を探してみたが何一つ残つて
はいなかつた

俺の存在が無かつたことにされたようだ

誰からも認識されず、存在が抹消され意識のみが残された俺はまる
で幽霊の様だ…

絶望にうちひしがれ崩れ落ちるなか俺は一つの事実を思いだした

以前呼ばれた近所の人の名前は数年来の付き合いのある人物であつ
たと言うことを…

一日三回？ 把握

今まで特別なことをしてきた訳じゃない

善行をしてきた訳じゃないけど悪行を働いた覚えもない…多分…

なぜ俺がこんな田に…

とりあえず状況を整理すると

- ・人から見えていない
- ・今までの生活の痕跡がない
- ・物には触れるからいつの間にか死んでた訳ではない

こんなところつか

幽霊というよりは透明人間だな…

「イケダさんですか？」

うなだれてた顔を上げると知らないおっさんが俺の顔を覗いていた

「そうですが、どうやら…」

…あれつ？見えてるのか…？俺を…

「いやあ、災難だったねえ」

「俺の事が見えてるんですか？」

「ああ、私も君と同じ境遇でね」

俺だけでは無かつたのか…

少しの安堵と共に疑問も浮き出てきた

「何で俺の名前を？」

まあまざはこの辺りだ

「私たちは毎朝の放送をチェックしてできるだけ新入りを迎えに行つてるんだ」

私たち？

「私たちと言つことは他にも？」

「ああ、私のグループは50名程で行動している。…おっと、私の名前はヤスダだ」

「俺たちみたいのが50人も…」

「あの放送が始まつて半年は経つんだ名簿に記してただけでも千人は確認してるよ」

そう言えばそうだ、1日8人だとして 180×8 で1400人程度いるわけだ…

「俺はどうなつてしまつたんですかね？」

まあこれが一番気になるな…

「まあ今の状況の通り、普通の人たちからは見えてないし以前の個人情報などは消滅している」

「それ以外の説明の出来る人間は仲間にはいないんだよ… いずれにせよ我々の常識から外れた出来事だ」

そこまで情報をもつてゐるわけじゃないのか…

しかし同じ境遇の人間がいたと言うことは心強いな

「一人でも食うには困らないだろうが身の安全は守れないだろう、我々の所に来るといい」

「危険？何がですか？」

「君はインビジブルと言つ映画は観たことあるかい？」

「ありますけど… 透明人間が人を襲うやつですよね？ ……！」

「ああ我々も透明人間のようなものだ」

「仲間かいるから私たちは孤独ではないが仲間ではない人間の中にはモラルを失つた奴等もいる」

「どうか… こちら側には警察も干渉できないのか…

確かにこの状況を利用しようとする輩もいるだろうな…

「確かに覗きや盗みもし放題ですしね」

俺がそのままとヤスダさんは少しばつの悪い顔をした

「私たちも向こうの法律を全て守つてる訳ではないんをだ…」

「我々が独自に食料などを生産するのは難しいんだ…だから最低限

の必需品は押借している

確かに…食料を作るにはそれなりに土地がいる

管理の行き届いたこの国ではそんなもの確保できないうだろくな

「しかしモラルのかけた行動は最低限にして秩序をもつた組織を作
るという考え方を持つのが私達のリーダーなんだ」

なんか釈然としないな…

俺たちを認識できない奴等に気を使つてどうなるんだ

「何か釈然としないようだね」

「エッ…」
顔に出てたか…

「まあ私も解るよ、私も始めはそうだった」

「我々はこちら側を隙間の世界と呼ぶのだが、そんな世界にルール
を作りつつしてこるリーダーの考えを聞けば共感出来ることも多い
だろ?」

「…話は聞きまじょう、常にあなたたちと行動するかは解りません
が」

「聞きたくに来てくれるだけでも良かったよ。あつ、そいつが今コー
ダーの名前はシジマと書つんだ」

シジマ…そいつがキー・パーソンになるのだろうか…

1日目？ 軌跡

ヤスダさんたちの本拠地に向かう道すがら俺はこれまでの人生を振り替えつていた

24年前俺は地方の片田舎で池多 衛>いけだ まもるとして生を受けた

小学生の頃は普通に暮らして中学生の頃は普通に過ごし高校も大学も普通

今のは（とはいっても今までだつたが）会社に就職し営業をしてたが大した成果もあげていない

彼女もいたが先日別れ……

あれっ？俺つて何にも無いな……ヤバい…泣きそうだ…

数時間前に無くした人生を惜しんで振り返つてみたものの、惜しむような経験も無駄になつた努力も見当たらないのだ。失つたもなにもない…

数時間前になんとなくの喪失感に沈む自分を思い起すと実に滑稽だな…

まあ俺くらいの歳で何かを成し遂げた奴などそうそういないわ…と、そもそもないことも気づきつつ自分を納得させた

「ヤスダさんていくつなんすか？」

先程の思考を拭拭するために話を振ってみました

「いやあ今年で53になるよ」

「へえーお仕事は?」

「貿易の会社を経営してたんだけど、む……息子にノウハウ品をこんで早々に経営を任せて隠居してたよ」

「息子さんそんなに俺と年変わんなそうですね」

「22になつたとこだつたね」

「俺より年下で会社任されたのかよ……ハア……」

「着いたよ」

郊外から離れ人気のない山道によくある潰れたラブホテルが本拠地
だった

中に入るところらほらと人を見かけたが中には怪我人もいた……やはり
争うこともそれなりに見かけた

シジマの元へ向かう途中高校生位の子供が近寄ってきた

「よつやく帰ってきたかヤスダ」

「ハアー?なんだこのガキ!上の人間にに対する言葉使いじゃないだろ
!?

「そいつが新入りのイケダか？」

俺にもタメ口とは……礼儀教えてやろうか？」

「やうだよシジマ君。ほらお互い挨拶しなきゃ」

「……」「こいつがリーダー？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8748z/>

隙間の文明

2011年12月27日20時45分発行